

## 論文の要旨

論文題目 **After Babylon: (Im)possibility of the Revelation of God in the Works of Nathanael West, Flannery O'Connor, and Thomas Pynchon**

バビロン以後の世界——ナサニエル・ウエスト、フラナリー・オコナー、トマス・ピンチョンの作品における神の啓示の（不）可能性

氏名 山辺 省太

学位 博士（文学）

授与年月日 平成 18 年 7 月 31 日

本論文の研究目的は、ナサニエル・ウエスト、フラナリー・オコナー、そしてトマス・ピンチョンの作品を通して、20 世紀中葉のアメリカ文学における神の啓示の（不）可能性を考察することにある。

アメリカとアポカリプスの関係は切っても切れない。ヨーロッパを「ヨハネの黙示録」に描かれている墮落の都市バビロン、そして、アメリカを神の国である「新しいエルサレム」とみなし、建国以来、アメリカ人はみずからの存在意義を終末思想の言説から紡ぎ出した。

20 世紀の「神は死んだ」といわれる時代、アメリカは物質的に繁栄するが、その内実は墮落したバビロンの世界であり、神の啓示はもはや不可能事であることがアメリカ文学において描かれる。その中で、3 人の作家は、神の啓示の（不）可能性をその主題に置く。彼らの共有した特質として、以下のことがあげられる。(1) 破壊的で暴力的な世界を描いていること。(2) グロテスクで墮落した人間を描いていること。(3) 「神は死んだ」といわれる時代において、作品の内容の違いはあるにせよ、神の啓示の（不）可能性について描いていること。(4) グロテスクで墮落した世界が、啓示の是非と関わっていること。

ウエストの文学は、グロテスクであると同時に暴力的であり、また神性のないアポカリプスの世界である。彼は徹底して神の啓示の不可能性を描く。しかし、ウエスト以降の作家であるオコナーやピンチョンは、この世界から啓示の可能性を探る。つまり、伝統的な神学では否定的にみなされた形象から、啓示の可能性を紡ぎ出そうとする。たとえば、マーク・テイラーは、「既定の意味を正負逆転させ、かつて神聖とみなされたものを一つ残らず転倒させる」が故に、「ポストモダン神学」は、「完全に冒瀆的」となら

ざるを得ない、と主張する。オコナーやピンチョンは、この「完全に冒瀆的」な方法で、バビロンの世界から啓示の可能性を導き出す。彼らの作品において、神性の他者と見なされていた悪魔やアンチキリストのような存在が、啓示を引き起こす媒介者となる。モダニズムの時代にウエストが描いたバビロンの世界から、どのように神の啓示を求める事が可能になるかということが、本論の大きなテーマである。

第 1 章においては、ウエストの『ミス・ロンリーハーツ』におけるバビロンの表徴を、作品に描かれている海と関連づけて考察した。この作品は、身体の分裂した、グロテスクな人間を通して、アメリカの荒地の状況を示し、そして、水のイメージを用いて再生への詩学を打ち出そうとする。しかし、再生の可能性は、「20 世紀のイエス・キリスト」といわれる主人公のミス・ロンリーハーツの墮落により不可能となる。さらに、この水は、浄化の水ではなく欲望の水であり、「ヨハネの黙示録」において「大淫婦」が座っていた海と結び付く。この章においては、アメリカにおける神性は墮落した欲望に取って代わられたことを指摘する。

第 2 章においては、ウエストの『イナゴの日』の分析を通して、彼のアポカリプスについて考察する。火のイメージを使いながら、この作品は終末の色彩を強く出す。「黙示録」において、火は浄化を行うものである。しかし、『イナゴの日』の火は、アメリカの物質文明によって汚染され墮落した人々の精神を浄化するものではない。むしろ、破壊の火となり、イナゴの如く辺り一面を焼き散らすのである。そして、「黙示録」に描かれた「新しいエルサレム」が到来することはない。そのことと関連するように、この作品では円やスピンのイメージが頻出する。サミュエル・ベケットは、ダンテの煉獄界が頂点を持つ円錐の形態を持つのに対して、ジョイスのそれは頂点を持たない水平の円であることを指摘する。そして、この頂点の是非は神の存在の是非でもある。『イナゴの日』の円は頂点を持つことなく、人々は破壊の火の中で踊り続けるのである。

第 3 章においては、オコナーの『賢い血』の分析を通して、彼女の描く神の啓示の可能性について考察した。オコナーは、この作品において、神の国の不在を帰るべき故郷の喪失に例え、そして、主人公のヘイゼル・モーツのグロテスクな身体と不安定な知覚を通して、現代の神の不安定な様相を表わしている。ヘイゼルは、神は安定した存在ではなく、分裂した状態にあることを彼の知覚と身体のパフォーマンスを通して示す。彼は神を冒瀆する行為に走るが、完全に神を否定しているのではなく、神の啓示の可能性を求めてさまようのである。たとえ冒瀆的な行為と見なされても神から目をそむけないこと、それがヘイゼルの誠実さなのである。

第 4 章においては、オコナーの「作り物の黒人」と「高く昇って一点へ」の比較分析を通して、神の他者性が、白人にとっての他者である黒人と共に浮上することを指摘した。この二つの作品における結末の決定的な違いは、「作り物の黒人」においては、登場人物の親子が神の恩寵に包まれているのに対し、「高く昇って一点へ」においては、息子が母親の死に直面し、神の恩寵の光が黒い闇によって遮られる様である。白人の登

場人物が黒人を理解できない他者として捉えるか、あるいは、自身にとって都合の良い理解可能な存在として捉えるかが、二つの作品の違いを生み出す分岐点である。それは、神を理解不可能な存在と見なすか、あるいは、理解可能な存在と見なすかということに繋がり、前者には、恩寵に満ちた神の国が垣間見られ、後者にはその国に入ることを拒否する神の怒りが表わされている。

第 5 章においては、オコナーの「善人は見出し難し」と「善良な田舎者」の比較分析を通して、彼女の描く「善」の問題と神の暴力について考察した。作品の主人公達は、他者を「善人」と呼び、自身にとって理解可能な存在とみなし、他者への倫理的な配慮を見せながら、自身の善を誇示する。しかし、二つの物語において、主人公達が理解可能と考えていた他者と顔を向き合わせた瞬間、他者の顔は不可視となり、そして主人公に暴力を行使する。この瞬間、主人公は他者の本当の姿と向き合うと同時に、理解不可能な神の他者性を目の当たりにする。オコナーの作品において、他者の暴力は神の顕現を生み出すのである。

第 6 章においては、ピンチョンの『競売ナンバー49 の叫び』を読解し、ポストモダンの荒地の世界において、神の啓示がどのように現われるかを、ナルシスと対置するエコーの機能を分析しながら論じた。たとえば、聖書の「聖霊降臨日」に表わされているように、神はその声を通して啓示を発するが、それは決して人間には理解されない。作中の「トライステロ」という、存在するかわからない秘密郵便組織は、消音機のついた喇叭をトレードマークとしており、声を発せず沈黙を保ち続ける。そこから音声が発するとき、あたかも「黙示録」において神の啓示を喇叭が告げるように、「トライステロ」の存在が明らかになるのである。エコーは、その啓示を引き出す機能を持つが、その声は主人公のエディパ・マースには決して理解できないものである。

第 7 章においては、『重力の虹』を分析し、ピンチョンの破壊と再生の詩学を考察した。第 2 次大戦において、ロケットは地上の荒廃を生み、それは精神的な頹廃をも生み出すが、それらは重力の力によって生み出される。シモーヌ・ヴェイユは、重力は神の創造以後に残った悪の力であると指摘する。しかし、作品において、ロケットによる破壊は地上の全てを無に帰し、デルタ t という領域を作る。そして、デルタ t のかなたには虹が出現する。ノアの洪水の後に現われるように、虹は再生の象徴であるが、ロケットは破壊と絶望をもたらしながら、その彼方に、再生の可能性を提示する。破壊と再生の両面を併せ持つデルタ t が浮上するときに、神の啓示も現れるのである。